

巻頭言

どんな医学領域でも基礎研究と臨床研究の間の距離は大きく、臨床応用への道のりが死の谷間と呼ばれることもある。脳神経領域では特にその傾向が強く、疾患診断の鍵になる蛋白質がいまだに見つかっていない精神医学の分野ではことさらである。

しかし多くの臨床家は、この分野でもスローながらも着実に進歩の軌跡が刻まれつつあることを見聞している。またマスコミは先駆的な知見を期待先行で発表するから、多くの患者さんやそのご家族から思いもよらない様々な質問がなされることも少なくない。それだけにわれわれの頭のなかでは未確認情報が錯綜している。

近年、うつ病領域において主たる研究テーマはモノアミンであり続けた。その過剰と欠乏に各種精神疾患の原因を求める本仮説は、ある意味で単純な考え方ではある。しかしそこから開発された SSRI や SNRI といった抗うつ薬には確かな効果が認められた。新たな研究視点も示されたが、パラダイムシフトさせるほどの有力なものには至らなかった。それだけにこの 40 年間はモノアミン仮説主導の時代であった。

ところが最近になって、脳科学という大きな傘の下で、基礎研究と臨床研究のギャップを縮めようとするムーブメントが進行し始めた。各種の研究共同体によって為される遺伝子研究、また脳由来神経栄養因子や時間生物学的研究に立脚したうつ病研究が活発になった。臨床面では、震災とうつ、あるいは自殺リスクを高める遺伝子といった話題もある。こうした研究成果の一端が、しばしばマスコミに取り上げられるのである。

本書においては、まずこうした最近のうつ病研究の話題が、整理され包括的な質問として要約された。それらに対して各領域の新進気鋭の研究者が研究の進行状況とこれまでの成果を記述している。よくある総説的な論文とは異なり、いわばリサーチ・クエスチョンに対して簡潔明瞭に答えるという Q&A 方式になっている。それだけに一読で現状を知ることができる。そして二度三度とくりかえし読めば、面白さがわかり、他人にもつい教えたくなるほどの知識として整理される筈である。

2016 年 12 月

東京医科歯科大学脳統合機能研究センター 認知症研究部門 特任教授
朝田 隆